

大和古寺紀行

利根川 裕

夜、寺に参つてみたい、というのが、かねてからの念願である。しかし、名のある寺はみな、夕景とともに参詣者を寺域から閉めだす。

フェノロサが「凍れる音楽」と称した葉師寺の塔を、寒天の月明りのなかで見たら、この音楽からは、樹水がカチカチと鳴るようなカデンツァが聞こえてくるかもしれない。

また、壮厳で端麗な法隆寺のなかで、そのまま闇に包まれていたら、梅原猛氏のいう聖徳太子のさまよえる怨霊に会わないうものでもない。

亀井勝一郎氏は、唐招提寺を月光のもとで見ることを空想して、こんなふうにいる。「わが古寺の円柱はいうまでもなく木造であるから、光を反射することは少ない。むしろ光を吸収して、柔らかく、その木目のあいだに湛えるといったほうがよい

だ。月光の下でながめたらば、いったん吸いこんだ光がかすかににじみ出るといったふうに輝いているのではなからうか。また円柱は光ばかりでなく、千二百年のあいだ、金堂に詣でた人々の息吹きや体臭や衣の香りまでも吸いこんでいるにちがいない」と。

これらはみな想像である。大和の古寺で、私たちはみな、想像力というかけ橋を渡って、古い人たちに出会おうとする。

ところで、私たちは、いくつもの仏寺やいくつもの仏像を拝しながら、何に出会おうとしているのだろうか。仏像は見るためのものではなく、祈るためのものである。と亀井勝一郎氏はいった。祈ることを忘れて、美術鑑賞のように仏像に対面するのは、宗教的にいえば、ひとつの背信なのではないか、というところに、氏の基本的立場がある。

かつて、そのかみの人が仏寺仏塔を建て、仏像を安置したのは、みな止みがたい祈願のゆえであった。してみれば、仏寺仏像を通じて、私たちが出会わなければならぬ究極なものとは、そういう祈りの心なのではないか。亀井勝一郎氏の『大和古寺風物誌』は、氏自身の、そういう心の遍歴の書である。

ところが、こう記す人もある。

「われわれが巡礼しようとするのは《美術》に対してであって、衆生救済の御仏に對してではないのである。たとえわれわれがある仏像の前で、心底から頭を下げたい心持になったり、慈悲の心にうたれてしみじみと涙ぐんだりしたとしても、それはおそらく仏教の精神を生かした美術の力にまいったのであって、宗教的に仏に帰依したというものではなからう。宗教的になり切れるほどわれわれは感覚を乗り超えてはい

ない」

和辻哲郎氏の『古寺巡礼』の一節である。

亀井氏の求道的な姿勢にくらべるとき、和辻氏の古寺、古仏への対しかたは、いちじるしく審美的であって、ただちに自己自身の信仰の問題とはつながらぬ。本来、氏にそういう態度が欠けていたというより、つとめてそうすべく抑制したといったほうが正しいであろう。

和辻氏は美的感動のよってくるところのものを引きわめようとする。それはしばしば、古代ギリシヤやルネサンスの美術、あるいはインド、中国の芸術と比較吟味される。そこで氏は、私たち祖先のもった世界を、普遍的世界の物差しで点検しながら、そこから、かつての人たちの人間の存在のしかたに出会おうとする。

亀井氏からすれば、和辻氏は「教養派」とみえていたろうが、和辻氏からすれば、亀井氏の信仰告白は、主観的な、あまりにも主観的な文芸的表現ともみえていたであろう。

年々歳々、多くの人が古寺、古仏のもとへ旅する。めいめいがそこで出会おうとす

るものは千差万別であるが、デイズニールンドやナイヤガラ瀑布を楽しむといったにぎやかな観光は別として、けっきょくは、和辻氏と亀井氏の立場がその両翼となる。私たちはその中間にあつて、ときに亀井的な自己告白に傾き、ときに和辻的な美的享受者に味方する。こういう意味では、二人の著作はふたつながら私たちのものである。

和辻氏の『古寺巡礼』も、亀井氏の『大和古寺風物誌』も、ともに筆者の三十歳ごろの作品。二人にとって、青春はすでに終わったか、終ろうとしていた。みずからの青春を跡づけるにあたって、二人は「古代」というふるさとを訪ねる。

私たちが大和へ旅するのも、たんなる観光とは違った、ふるさと帰郷の感情がある。私たちはこのふるさとで、自分の青春を確認したり、あるいは、青春と訣別した自分を発見したりする。どちらにせよ、それは自分が自分に出会う旅のこととなる。奈良を訪れた文人の数はおびただしい。そして、どの人もここで自分の青春に出会い、その体験は深くその後の人生に刻印されている。

たとえば、里見弴氏が、「春日神社を見てから、嫩草山に登る。どこへ行っても、鹿はもう影さえ見せない。見おろすと、奈良は、柔かな夕日を浴び、紫っぽい青味に薄霞んで、今、静に暮れて行くところだった。大空へ、鐘の音が滲みこむ」

と書く『若き日の旅』も、題名どおり、それは青春の奈良旅行のことであった。

ゲーテは、「私がローマの土を踏んだ日から、第二の誕生日、真の再生がはじまった」と、かの『イタリー紀行』に記しているが、そのひそみに倣えば、大和は、訪ねた多くの文人たちにとつても、また私たち自身にとつても、それぞれの『イタリー紀行』でもある。

ここ数年、私は大和を訪ねるとき、会津八一氏の『鹿鳴集』を携える。この絶唱をいくたびもいくたびも口ずさみながらの奈良が、さいきんの私の心に一番適っている。『鹿鳴集』中の一首をあげる。

おほてらの ほとけの かぎりひ
ともして よるの みゆきを まつ
ぞ ゆかしき